

JAMの主張

野党共同会派結成を歓迎 ～小異を捨てて大同につけ～



【機関紙JAM 2019年9月25日発行 第248号】

野党共同会派が結成された。ほんの2カ月前、参議院議員選挙を戦った私たちにとっては遅きに失した感
は否めない。しかし、この選挙結果が、今日の流れにつながっていることを真正面から受け止めたうえで、
野党共同会派の結成を歓迎したい。

9月19日、国民民主、立憲民主両党と衆院会派「社会保障を立て直す国民会議」の代表が国会内で会談
し、10月の臨時国会前に統一会派を結成することで合意した。衆院117人、参院61人の勢力で、衆院で
は第二次安倍政権発足以降では、最大の野党会派となる。

第二次安倍政権下の国会は、13年夏の参議院選挙で衆参のねじれが解消されて以降、一貫して政府・与
党ペースで進められ、不祥事も相次いだ。公文書の「隠蔽・改竄」や統計資料の「捏造・偽装」など、立法
府による行政監視機能が低下していると野党内では危機感を募らせていた。

9月21日に京都で開催されたJAM京滋20周年記念レセプションでは、民進党元代表・国民民主党京
都府連の前原誠司会長、立憲民主党からは福山哲郎幹事長、今夏の野党共闘統一候補として、当選を果た
した元滋賀県知事の嘉田由紀子参議院議員など、野党結集のキーマンが一堂に介した（写真）。

レセプションの中では、JAMから「共同会派結成にとどまることなく、5600万人に上る雇用労働者の
ためにも、さらなる高みを目指してほしい（新たな塊づくり）」との要請に対して、御三方それぞれがこの
ことに呼応し、共同会派にかける思いを語ってくれた。

ここで民主・民進時代の内紛を繰り返すようでは、国民からの信頼もおぼつかない。結集して政権に対峙
する。その使命を忘れずに、単なる「足し算」以上の成果へつなげる覚悟と工夫が求められる。

政策や感情的な部分も含め、議員間での温度差が指摘されている。政党が違うのだから、すべてを一致さ
せることは困難ではあるが、政権与党に足並みの乱れを突かれることがないよう、徹底的な議論のうえで折
り合いを見出すことが必要である。まさに、JAM結成の合言葉ともなった「小異を捨てて大同につけ！」
の一語に尽きる。

「一強他弱」と呼ばれる国会に緊張感を取り戻し、結集の力をバネに、政権の権力行使を厳しくチェック
する野党本来の役割を果たさねばならない。

これからの野党再編を見守りたい。